

CITY & LIFE

都市のしくみと暮らし

1985・冬号

Vol. **5**



特集

都市と盛り場

点値なすひとてのを空息ヒ
 を観いまとども空意間ぬト
 のこすつりい間識だきの
 変い重核そだとりせず家場
 動空間にとうあえな族所
 、、間になてのい。ず活動身。ま
 盛都であって盛都市化の盛
 り市ある盛り場の都市のな
 場生活盛り場。都市に会的
 を活のり場。都市に会的
 考ア。都市に会的
 えメ。都市に会的
 みニ都市に会的
 たテ市と役
 いイ生活割
 。と活ては
 い者の重
 うの価
 視

Contents

特集◎都市と盛り場

- 都市の核としての盛り場／鈴木博之 2
- 〈座談会〉文化的な活力を生み出す盛り場の
源流を求めて／日笠端・陣内秀信・高見澤たか子 5
- 世界の盛り場アラカルト 10
- 東京の盛り場パターン 12
 - ーパイロット・モデル渋谷／大田雅和
- ロンドンと盛り場／山岸 健 14
- 若者の盛り場イメージ／池田利道 17
- 都市計画手法でつくられた東京の副々都心
吉祥寺の盛り場 20
- まちづくり思い出ばなし④／高山英華 24

INFORMATION / 編集後記



トルコ・イスタンブール Photo ●神山貞次郎
 表紙絵 ●Ralph Fasanello

都市の核としての盛り場

鈴木博之

盛り場という言葉は、ごく当り前の日常語のように思われているけれど、実はそこからイメージされている実体は、人によってかなり違うのではないだろうか。

都市の中心にあって、商店や娯楽施設で賑わっている場所を盛り場とイメージする人がもともと多いであろうが、商店と娯楽施設は同じものではないから、そのどちらにウエイトを置くかで、盛り場のイメージは変わってくる。商店に重きを置けば、盛り場の源流あるいは原型は中世のマーケット・プレイス（市の立つ広場）やバザールのようなものになってゆくし、娯楽施設に重きを置けば、それは宿屋や酒場や、あるいは遊郭などの悪所に近づいてゆくかもしれない。

もちろん、盛り場の持つ多様な性格はひとつひとつがバラバラにあるものではなく、巧みに組み合わせられて存在していることが多く、そこにこそ盛り場の盛り場たる所以があるともいえる。市場と宿場がわち難く結びついていたり、門前町と悪所が合体したような盛り場があったりするのは、むしろ当り前ののである。

盛り場に対するイメージが人によって微妙に異なったものになるのは、盛り場自体がひとつの性格、つまり都市のなかでのひとつの機能を果たす場所ではないからである。複合した働きをもつ場所があり、そこに人がさまざまな目的をもって集まる際には、はじめて盛り場のイメージが生じてくるのである。

都市というものが、さまざまな思惑をもった人々の集まり住む場所であり、そうしたさまざまな思惑が交錯す

る場である以上、都市にはどこかしらに盛り場が出現する。けれどもそれは一口に盛り場といっても、人々の思惑の数と同じ位に多様なものとなって出現するのではない。だからここでは、盛り場のあり方を都市に住む人々の側から、そして都市を成立させている性格それ自体の側から、考えてみたいと思う。

●祝祭性と無名性

盛り場の特徴のひとつは、それがすぐれて都市的なものだという点にある。多数の人々が集まり、複数の目的がそこで果たされようとする場所が盛り場なのだから、どうしてもそれは都市的な性格を帯びることになる。農村や小さな集落に盛り場がないわけではないが、そうした盛り場は特別の日の立つ日や、お祭りの縁日などのときに生ずる場合が多い。つまり、それは一種の祝祭を契機にして生ずる都市性の産物なのである。

盛り場の賑わいのなかには、多かれ少なかれ、日常生活を離れた、非日常的な祝祭の気分が漂っていたのである。社会全体が身分制度に縛られ、生活が地獄血縁のしがらみに束縛されていた時代には、盛り場の持つこうした祝祭的な性格は、人々の生活に変化を与え、息抜きを与えてくれるものであった。そうした盛り場の賑わいのなかで、人は誰とも知られず、また誰をも知らぬ身軽さで、つかの間の自由を享受することができたのである。

そこから、盛り場の持つ第二の性格、すなわち無名性という特徴が現れてくる。盛り場のなかでは、群集

のひとりとして、日常の束縛からの解放を味わうことができる。まさに盛り場は盛り場であるが故に人が集まり、人が集まる場であるからこそ、さらに人が集まるようになるのである。祝祭的性格と無名性が、さまざまなタイプの盛り場に共通して認められる吸引力の源泉なのである。

しかしながらこの性格、都市のなかでの祝祭性と無名性という性格は、都市をこゝと改めて分析しようとしたら、再構成しようとしたらするときには、実につかまえない概念になる。もともと盛り場というものが、ひとつの都市機能の概念でくりくりにくいものであり、しかも現実の盛り場は一種の性格に整理できないものだからである。

二〇世紀の都市観に非常に大きな影響を与えた言語に、一九三三年にまとめられた『アテネ憲章』というものがある。これは世界各国の建築家たちが集まって作ったCIAM（国際近代建築会議）の第4回会議で作成されたものであり、そこでは都市の機能が、住居、余暇、勤労、交通、歴史的遺産の要素に別けられている。つまり、都市とは、人が住んで働いて楽しむところであり、そのための要素と、交通と過去の遺産とから成り立っているという考え方である。

盛り場は、当然『アテネ憲章』の考え方のなかでは、余暇という要素に含まれると思われる。しかしながら『アテネ憲章』の説く余暇とは、つぎのようなものである。

自由時間ないし余暇は二つに分類できる。すなわち、毎日のもの、週ごとのもの、年ごとのもの。毎日の

になる。しかしながら、都市の核を新たに作り出すことはなかなか難しかった。むしろ都市の実態は、別の方向に進んでいったと考えられるのである。

●オフィスビル化する都市空間

近代建築が都市を支配し、征覇してゆくとともに、近代建築はその成立時期に見られた単一の機能性を乗り越える方向に進んでいった。はじめのうちは、はっきりと用途を示し、その用途のために明快な表現を与えられていた建築が徐々に複合的な建築、総合的な建築へと向つ



上 新宿NSビル内部 (Photo: 神山貞次郎)
中 藤沢市内 (Photo: 神山貞次郎)
下 ドイツ・ローテンブルクの市庁舎前 (Photo: 鈴木博之)

自由時間は住居の近くで過ごすようになってなければならぬ。週ごとの自由時間では市外に出たり、地域的な移動も許される。年ごとの自由時間、いいかえれば年次休暇には、市を離れ、地域外にほんとうの旅行することも考えられる。このように問題を設定してみれば、余暇のための緑地の保有は、(一)住居周辺に、(二)地域の中に、(三)国土の中に、確保されることが求められることになる。(吉阪隆正訳)

は、余暇の空間は戸外の運動の場として、グリーンあるいは運動場や公園としてイメージされているのである。都市を機能別の要素に分解してゆこうとしたとき、『アテネ憲章』は盛り場という概念や実体を捉えることができなかったのである。言い換えれば、盛り場という概念が意外に複合的で、『アテネ憲章』の都市分析の方法になじまなかったのだ。

『アテネ憲章』をまとめたCIAMの組織はこの不十分さに気づいて、都市の中心となる要素を『都市の核』と名づけて、その実例の収集と性格の解明に努力すること

ていったのである。

この動きは、例えば『アテネ憲章』のあげる都市の要素のひとつである、勤労のための建築について見れば、もっともはつきりと理解できようであろう。勤労の場としての建築は、近代初頭にあってはまず第一に工場であったが、それはだちにデスクワークの場であるオフィスにその主流の位置を譲りわたした。社会が単純な工場生産から金融や情報の流れを主体とするものに変化していったことがこの現象の裏にあるのだが、そこで主流となったオフィス・ビルは、現在では単なる執務空間、デスクワークの場だけではなくなっている。

現在のオフィス・ビルは、そのなかにショッピングセンター、飲食店街、そしてさまざまな文化施設さえ含むようになってきている。こうした傾向は、オフィス・ビルが大型化し、そうした大型オフィス・ビルが都市中心部を征服するようになるにつれて一層顕著になってきた。都市の経済活動がオフィス・スペース中心になるにつれ、オフィス・ビルがそのなかに都市の機能を含み込む複合型のものになってゆくのである。極端な言い方をすれば、人はオフィス・ビルの中で働き、食事をし、買物をし、帰りに一杯飲み、休日に教養をつけることすらできるようなになっている。

こうした現象は、オフィス・ビルの都市化だといってよいであろうが、このオフィス・ビルの都市化という現象がおきるのは、それだけ都市がオフィス・ビルによって征服されているということであり、むしろ都市のオフィス化によって生じた現象なのだと見ることもできる。

巨大なオフィス・ビルは、都市をまるごと建築化する方向に進んでいるのである。

こうした傾向は、それまでの盛り場を大きく変えるものとなりかねない。都市のなかでの自由な空間として、祝祭性と無名性を備えていた盛り場は、多くの都市機能

が建築のなかに複合的にとり込まれてしまうことによつて、にわかにさみしいものになりかねない。会社に勤める人たちは、朝出勤するが最後、家に向って帰るまで、そのビルの外には現れないという行動パターンをとるようになるからである。

しかも、オフィス・スペースに対する生活スペース、つまり住居のあり方は、ますます厳しいものになりつつある。通勤時間、住居スペースの面積、住宅の価格は、三つ巴になってわれわれの上にのしかかっている。都市全体が、いまやオフィスと住居とに分極化し、その極限にまで伸び切ろうとしているように思われるのである。

●新興住宅地に生成する第三の盛り場

そのとき、盛り場はどのようなものとなってゆくのだろうか。自由な空間として都市のなかに祝祭性と無名性をもたらし盛り場は、都市が建築化し、建築が都市化してゆき、都市域が極限まで拡大してゆくときに、どのような場所に、どのような性格のものとして花びらいてゆくのか。

ひとつの傾向としては、都心部の盛り場の凋落あるいは退廃という危険性がある。都心が生活の場とかけ離れすぎてゆく結果、都心の盛り場は日常の生活パターンの中で大きな位置を占めにくくなってきており、生活から切り離された場としての性格を強めつつある。良い方向にこれがすすめば、都心の盛り場は祝祭性を強め、日常性から飛躍できる夢を与えてくれる場所となつてゆくであろうが、悪しき方向にすすむときには、それは無責任と紙一重の無名性に墮した一種の悪所と化する。この傾向は、どうやら現在の都心の盛り場には、ふたつながら現われはじめているようである。それがどのような形にまで行きつくのかは予測できないが、未来の大都市が、繁栄と荒廃とを背中合わせにもった都市に向ってすすんで

行きはしまいかと、いささか不安に思われるときがある。いずれにせよ、これまでの盛り場のイメージで未来を予測したり現在を分析したりしていると、それは現実と大きくかけ離れた像を見ることになってしまいうてある。同時に、いま、新しい性格の盛り場もまた生まれつつあるように思われる。たとえばいま、吉祥寺、藤沢、大宮などの町が変貌しつつある姿を見ると、そこに生まれつつあるのは、都市の空間の分極化のなかで、住居に接近した盛り場の生成だと思われるのである。

これまでの盛り場は、日常性を離れた、非日常性の空間を提供するところにその存在の本質があったのだが、それが現在では、日常の場に本拠を置いた、住居のエリアに結びついた盛り場へと変貌しつつあるように思われるのである。こうした盛り場が、いままでの盛り場と本質的に異なったものとなってゆくのか、あるいは盛り場の本質としての祝祭性と無名性を必らずもちつづけても、その現われだけを変えてゆくのか、そのところは予測がつかない。

われわれが自分の行動のパターンを振り返ってみるならば、それが江戸時代の人々とはまったく違うものであるのは無論のこと、二十年前のそれとも明らかに異なっていることにも気づくであろう。それが、われわれの生活時間の用い方の違いとなつて現われていることは事実であるが、そのどこかしらに、盛り場に費される時間は必ずある。その点においては、江戸時代も現代も、かわりはないようである。都市を分析するときにもっともつかみ難く、単一の機能に分類できないだけに、盛り場はもともと永続性のある都市要素だといえるのかもしれない。住宅が変わり、オフィスが出現し、新しい都市要素が出現しても、したたかに残つてゆく盛り場は、古いが故に新しくなり得ているのかもしれない。

(すすき・ひろゆき 東京大学助教授)

座談会

文化的な活力を生み出す

盛り場の源流を求めて

日笠端・陣内秀信・高見澤たか子

匿名的で自己解放のできる 都市にしかない場所

高見澤 今日日は「都市と盛り場」というテーマでお話しただきたいと思っています。盛り場は都市のかけがえのない要素であり、また都市の文化を秘めている場でもあるわけですが、そうした意味で先生方にとっても思い入れのあるテーマではないでしょうか。とはいっても盛り場に色々な形がありますし、歴史的にも動いております。また、年齢によって盛り場のイメージも違ってくると思います。そこで、まずは「盛り場」とは何だろうか、といったあたりからお話を伺わせてください。

日笠 盛り場の概念というところが、僕らの子どもの頃はあまり、いい意味は持ってなかったですね。親からはまず盛り場には行っちゃいけないと言われましたね。スリがいたり、買い食いしてお腹をこわしちゃいけないとか。で、東京という、浅草というのが盛り場の典型で、一方において銀座というのは盛り場とは呼ばない。同じように人は集まるんだけど、どちらかといえば下町的で大衆的な場所が盛り場、というイメージですね。ただ、現代ではそれも変化してきて、買物とか映画を観るといったような目的以外にただ大勢の人のいるなかに行ってみたいというのがあって、日夜いろいろな意味で人が集まる繁華街が盛り場といったものになっているんじゃないかという気がします。

陣内 世代によって盛り場イメージが少しずつズレてき

てますね。私どもがイメージするのは、やはり浅草のような近世的な町よりも少し現代的な若者も集まれる街を考えてしまいましたが、ただ共通して言えるのは、盛り場は都市にしかないという点でしょう。農村の場合、年に何度かのお祭りや日常性から解放されて楽しむ場が巡ってくるわけですが、都市には常にお祭りの華やかな場所が盛り場として用意されているということがいえるわけです。つまり、盛り場というのは日常的に存在しているハレの場じやないかと私は思うんです。

日本の都市の在り方を見ると、主要な機能としてまず、家族や地域のコミュニケーションがあつてそこはアメニティが高く文教地区のようになっている。それからもうひとつは職場があり、そこは管理でがんにがらめになつていて、そのふたつを外れたところに盛り場が在ると思います。ですから、夜、お酒を飲んだり、もつとアナキイなアンダーワールド的な部分も含めて、自己解放できるはれがましい場として盛り場は存在するのではないのでしょうか。それにはやはり、都市の持つ匿名性、無名性が要素としてあるわけですが。

そのあたりが西洋ではあまり発達しなかったと思うんです。やはり、都市の中での文化形成のメカニズムとか家族関係の構造自体が違つていて、日本の盛り場のイメージはアジア的だという仮説を私は持っています。

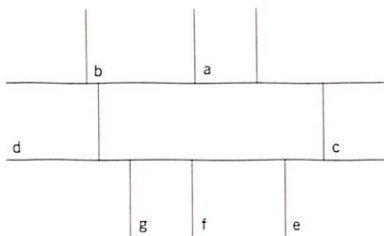
高見澤 そうしますと、盛り場も国によってかなり異なるといえそうですが、陣内先生は著書の『東京の空間人類学』で江戸の盛り場が隅田川の水辺の空間を中心に展

開してきたことを指摘されていますが、現在の東京の盛り場にもやはり「江戸的」なものというのは残つていますか。

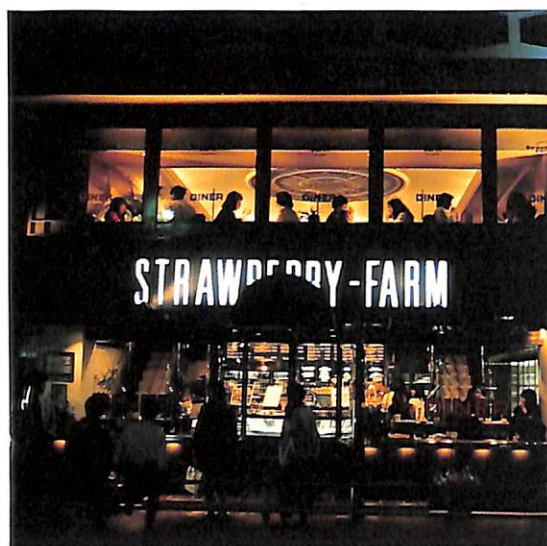
陣内 実は東京というのは近代になって、かなり中心的な場所が動いてきまして、戦前までは浅草、それが銀座、新宿と比重が移つてきています。その中では浅草にはやはり水と結びついて、下町に生まれた、典型的な江戸の盛り場の名残りがみられると思います。それから、今はだいが、さびれましたが深川の門前町なども水辺の富岡八幡の前に出来た盛り場ということで、今でもかすかにその名残りを留めているようです。また、大阪の道頓堀や博多の中洲などもその点で典型的といつてもいいでしょう。つまり、日本人にとつて心を解放するには、自然に面している川の近くなどが具合がいいんです。水辺は非常にセンチメンタルな場所であり解放感も味わえるのです。このような場所が本質的な日本の盛り場なんだろうけど、近代にはやはり交通手段の変化というのが大きく作用しているようですね。

高見澤 日笠先生、今の地の利という点では交通機関の変化が大きいようですが、都市計画という面からは、人為的に盛り場を盛りこんでいくというのはどうなんですか。

日笠 陣内先生にすっかり言われちゃったんですが(笑)やはり昔は自然の要素、川とか水とかの要素が強かった。それと、もうひとつは寺などのように人文的なものが関係している盛り場も多かったんじゃないかと思うんです



- a、銀座マリオン前
 - b、大阪道頓堀
 - c、代官山
 - d、六本木防衛庁そば
 - e、新宿歌舞伎町
 - f、浅草
 - g、池袋サンシャイン通り
- Photo: 伊那英次



さな盛り場があったようで、たとえば麻布十番のような色街があったし、本郷にも芝居小屋や寄席がありました。そういう近世的なものがミックスして賑わったのですが、それが、山手線のターミナル側が外に出現したのに伴って小さな盛り場は衰退していったといえると思います。

高見澤 先程「非日常性」という盛り場の魅力をお挙げになりましたけれど、今は、そうした非日常性の毒気というものが抜かれてしまっているという気がしますね。

陣内 よく言われることですが、タモリのようなアンダーワールドな芸が白昼堂々とやられているように、確かに表と裏、光と闇……といった二分割の構造が無くなって、風化した風景となっているというのは感じます。ですから、若者の行く盛り場はあつていかんとしている。ファッショナブルなだけでドキドキしないです。

高見澤 盛り場も非常に低年齢化が進んでいるという気がします。たとえば赤坂のような以前ならば近づき難いイメージのあった場所なども若者達にどんどん浸食されていますね。そうした場所の大衆化といえますが、子ども文化の画一が目立つような気がします。

陣内 「盛り場の三重構造」というのを聞いたことがあります。たとえば新宿を例にとりますと、伊勢丹とかタカノなどのファッション中心の地域が昼の顔。それは割に駅に近い所にある。ふたつめが会社が終わってからお酒を飲む場所が集まっている地域。そして、三つめがいちばんあやし気な部分で、ラブホテルとかソープランドが集まっているところで、このように段々、奥へいくというステップがあります。これは渋谷でも同じです。ところが、今のうちに若い人がどこにでも沢山集まるようになると、この三つの構造そのものは変わらないんですが、特にふたつめの地域がいろいろと変化しているんでは、という気がします。近頃の若い人達は男女半々とか、女性だけのグループで街を歩くことが多いしあまり女性という意識しなくても楽しめる文化というのが出来ているようです。ラブホテルにしてもカフェバーのように気楽に入れて待ち合わせもできる場所などもあるそう



日笠 本当になんか一体、どこに行ったらいいの(笑)。その原因というのはやはり交通条件が大きいんでしょね。それが盛り場に夜の顔と昼の顔を生み出している。それに、買い物ひとつとっても、文化性というものが、それが強くなっている、その情報欲という面も出てきているし、また、どこにどういってお店があるかといった情報によって動いているところもありますね。都市計画をやっていると、その辺がうまく調整できたらと思ったりもします。



日笠 「東京行進曲」という歌がありまして、あの中でも、やはりデパートとか地下鉄がすでに大変な魅力だったんですね(笑)。非常に当時としてはモダンだった……。

陣内 東京でいえば地下鉄・銀座線が最初の地下鉄で、これが上野・浅草間で開通して次第に銀座から渋谷へと伸びていったんですが、大体、この線が当時の主要な盛り場をつないでます。まず、主なデパートがその銀座線沿いに出来てまして、昭和初期のモダンな文化をショッピングと結びつけるという発想がみられるわけです。したがって、ターミナルより先に日本橋、京橋、銀座……という街のデパートと大衆の関係が生まれていると思います。

よ。浅草の観音様などがその典型ですが。門前町というのはお祭りの要素もあるし、それがひとつのシンボルにもなっている。ところが、それが交通の条件とも大きく関わってきていて、そのシンボルが人為的なものにどんどん変わってきているということでしょうね。

高見澤 現代では、たとえば昔の職人さんのように休みの日を待ちかねてやむにやまれぬ気持で盛り場に駆けつける、というようなことは考えられませんか。毎日毎日、日常的に私たちは盛り場を通過しているという状態ですけど、時代と共に私たちと盛り場の関係が変化しているわけですね。

日笠 かつては浅草なんかは敷入りとかで小僧さんが行く町、銀座などは山の手族が行く町、という風に分かれていて、それはやはり江戸の町の構造と関係があつて旧旗本屋敷と町人町とが画然としていたというのがあつてうですね。ですから、山の手族は下町へ行くにはお忍びで行くという(笑)。だから銀座でも一般大衆をうまくひきつけるには夜店のようなものが出来たんじゃないですか。高い店には行かずに夜店で楽しむというか……。

陣内 夜店は銀座以外にも四谷をはじめあちこちにあつたようですね。それに戦前までは、比較的山の手にも小

盛り場の屋の顔、夜の顔を崩す若者文化

陣内 デパートもフランスやイギリスの模倣だったんでしようが、日本の獨創性があつて屋上の遊園地とか大衆食堂とか、とにかく日本人はパツク化が上手ですね。盛り場にしても、さまざまな要素……観て、飲んで、食べて、という肌で感じる部分——今日風にいえばパフォーミングスとしての刺激——によってリフレッシュされると思いますか、その要素が大きいし、また、それをうまくひとつの建物の中にセットしたのがデパートなんじゃないかと思っています。



高見澤たか子(たかみさわ・たかこ)生活評論家

世界の盛り場アラカルト

日本と西洋では、盛り場の成り立ちが違ふようだ。日本では商業が盛り場をつくり、人が集る。西洋では広場や大通りがあり、そこに人が集り、にぎわう。



▼西ドイツ・ミュンヘン市役所通り
旧市庁舎、新市庁舎が並ぶマリエン広場を中心とした一帯は、観光客で夜遅くまでにぎわう。(Photo: 熊切圭介)

▶イギリス・ロンドンのコベントガーデン
元の農作物市場をショッピング・センターに再開発した。新しい盛り場空間となっている。(Photo: 徳田敦司)



▼フランス・パリのサンジェルマン通り
実存主義の生れた場所として世界に知られたサンジェルマン・デ・プレは有名店が集る歓楽街となった。(Photo: 熊切圭介)



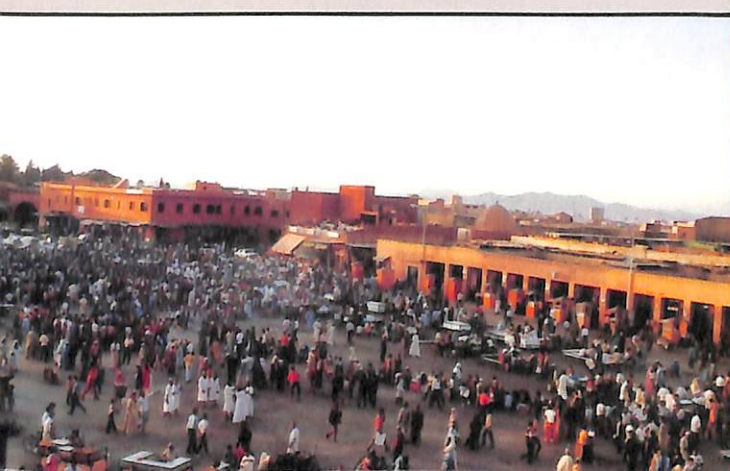
▲アメリカ・ニューヨークのタイムズスクエア
この辺りが最も活気づくのはショーやミュージカルがはねた後。馬に乗った警官が交通整理に乗り出す。(Photo: 普後均)



▲スペイン・バルセロナのラングラス通り
カタルニーヤ広場から地中海にぬける遊歩道。キオスク、露店の花売り、小鳥屋などにぎわう。(Photo: 徳田敦司)



▼モロッコ・マラケシュ
夕方になると市民、芸人、物売りの集ってくる「狂気の広場」。映画もテレビもない都市の憩い。(Photo: 三輪恒)



●街全体が一つのデパートの時代

街の集中化が加速度的に進んだのが七〇年代だとすれば、今は街の拡散化の時代だと言えます。七〇年代は、隣の人と同じ生活をし、同じ店へ行き、同じ物を持っていけば安心できたので、安くて、品数が揃っている大型店に人が集まった。しかし、オイルショック以降、他人と同じ生活をするのは嫌だという人が増えはじめ、各人の好みやニーズがばらばらになってきて、誰でも入れる平均的な品揃えの店よりは、他の店にはないような独自の品揃えのある店、店員との対話のある店が人気を集めるようになりました。街はずれや裏通りに、特徴のある雑貨屋、飲食店、ブティックなどの新しい小さな店ができて始め、これが若者を中心に予想以上の人気を集めてしまったのです。

これを街の開発の考え方という、以前は駅前に大きなデパートを作ればよかった。パケツ型デパート。といって、駅を蛇口にしたとすると、蛇口をひねって出てくる客を、全部駅前のデパートだけが受けていた。ところが、生活者の方が多様化してくると、一つの受皿では受けきれなくなってくるわけです。そこで、街の活性化を図るには、穴アキパケツ型。というが、ザル型の方がいい。パケツに水を入れたら、周りにザアッと出てしまふ。デパートで欲しいものが見つからなかったら、周辺の特化した店へ出ていけばいい。つまり、一つのパケツで完結しないで、街全体を一つのデパートと見る考え方に変わってきています。

この志向の多様化という人間の心理、とりわけ若者の心理に、ビッタリ対応できたのが渋谷です。渋谷は、もともと谷間の街であったために、地形が複雑で、路地も多く、小さい店が自然にできてしまった。要求が一本化している時代には、こういう条件は非常に不利だったのですが、オイルショック以降、渋谷の方も多様化に合わせた街づくりを進めたということもあるの

いる伊勢丹までの新宿大通りと、その周辺をいうことになりました。大通りの両側には人をひきつける路地が何本もあり、街の魅力もかなり多様化しています。

●循環器型タウン・渋谷

そして、渋谷です。渋谷の動線グラフは、公園通り、駅から「109」ビルまでの大通り（動脈）から、井の頭通り、センタ―街、東急本店通り、道玄坂といったサブメインの通り（静脈）も発達し、さらに動脈、静脈をつなぐ路地群（毛細血管）もクモの巣状に拡がって、見事に「循環器型タウン」を表わしています。

路地裏にある店は、大通りからあふれた若者をいったんプールして、大通りの人通りが減ると、再び大通りに人を引き出すことから、街にとっての遊水池のような働きをしているわけだ。この路地ゾーンを「スポンジゾーン」、路地裏の店を「スポンジショップ」と呼んでいます。スポンジショップの業種は、デザイナーブランドのブティック、輸入雑貨屋、カフェバー、ピストロなど、渋谷では路地にはスペイン通り、ペンギン通り、SING通りなどの名称がつけられ、若者の多様なニーズに、きめ細かく応える構造になっています。これらのスポンジゾーンが遊水池として機能するには、大動脈に人を導く、パルコ、東急ハンズ、「109」などの大型商業ビルが存在も欠かせません。

また、スポンジショップと同じような働きをしているのが、「六〇〇メートルショップ」です。「六〇〇メートルショップ」とは、アンアン、ノンノ、ブルータスなどの若者向け雑誌でここ二年ぐらいの間に紹介された店を、地図上におとしていったところ、非常にきれいに、駅から六〇〇メートルのライン上に並んだことから名付けたものです。これらの六〇〇メートルショップがいくつか集まって、現在、渋谷では、パルコ丘、キャットストリートなどの六つの人気ゾーン（渋谷地図参照）ができており、カフェバーやブティック雑貨店、一軒家のブティック、ピストロなどが、その店目当てで、わざわざやってきた若者でいっぱい

です。駅から六〇〇メートルという、ブラブラ歩いて約一〇―一五分。

ですが、路地や坂道に小さな、冒険心のある店がコチャコチャあるというのが、若者の発見心をくすぐり、今や、渋谷は若者に一番人気のある街になってしまったのです。

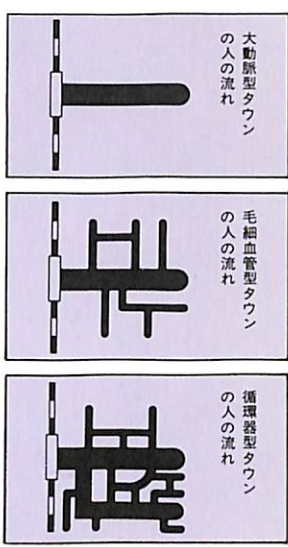
●動線でみる盛り場のパターン

街の拡散化、言い換えれば路地の発展状況は、動線グラフをとってみると明らかです。下の図は、一〇〇人程度のサンプル客の、街における動線を調査し、その全員の動線を重ね合わせたもので、通行量の多いところは太く、少ないところは細く表わされています。

池袋、御茶の水では、一本のメインストリートだけに人が集中して、路地にはあまり客が入り込んでいません。このような街を「大動脈型タウン」と呼んでいます。池袋では、サンシャインと駅を結ぶ通りが大動脈にあたるわけで、サンシャインシティと駅構内のデパート以外には、人を引っ張る力がないといえます。

御茶の水も同様で、駅から駿河台下、小川町にかけての大型スポーツ店までが大動脈となっています。スキーシーズンの前ともなると、車道の一車線を歩道にあてなければならぬほどの大混雑です。しかし、この混雑は商品の魅力によるもので、駅を出た人は目当ての店へまっすぐ行って買物をした後、また同じ道を駅へ戻ることが多く、街自体の活性化につながることは少ないようです。

人の動きが単純な「大動脈型タウン」に比べて、大動脈「大通り」からはずれた脇道にも魅力的な店があり、路地にも血が通い始めている状態の「毛細血管型タウン」、この典型が新宿や吉祥寺です。新宿といえば、盛り場の代名詞のように使われる歌舞伎町がありますが、ここは、映画や風俗営業、飲食などの特別の目的をもった人をひきつける力がありますが、昼間のショッピングを楽しむ人たちがひびくのは、大動脈の役割を果たして



それ以上の距離になると、隣りの駅の方が近くなるということもあって、通常のショッピング行動では、この辺までが歩く距離の限界です。つまり、駅から六〇〇メートルぐらいの所が、街はずれ「盛り場」はそれと違うことになります。この辺までくると、駅前には比べると地代も三分の一〜四分の一になるので、小資本で冒險的な店もできやすいわけです。

ちよつと古いかもしれませんが、文化屋雑貨店が、ちょうど駅から六〇〇メートル。この店ができた当時は、このあたりは通行人などほとんどいないような街はずれだったのが、この店の出現によって一変し、今では、店の前の通りは「ファイヤーストリート」と呼ばれるファッション名所の一つになっています。

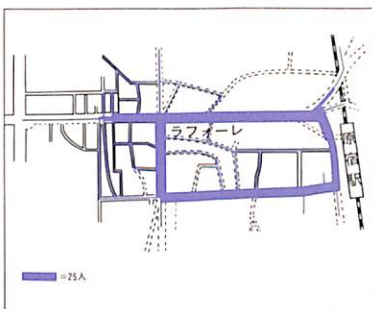
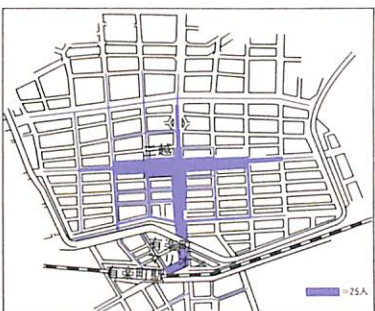
この六〇〇メートルの街はずれ、要するに盛り場と住宅街の境い目なんです。ここには必ずクリーニング屋、床屋、米屋などがある。これらの店は、盛り場に立地すれば地代が高すぎてやっていけないので、常に盛り場と住宅街の波うち際に置かれる運命にあります。ですから、若者たちに今一番人気のあるナウイ店と、クリーニング屋が軒を接しているという面白い現象が現われるわけです。

また、渋谷では、東急文化村、野外音楽堂、電力館、国立文化センター等の人を集める装置を街はずれに散らばせていく動きもしているの、新しい動脈、静脈、毛細血管ができていく可能性は充分あります。

このように個々の細かい点を分析していくと、渋谷には、日本の街動向を示すモデルショップがたくさんあって、分析する方にとっても、非常に面白い街だと言えます。（談）

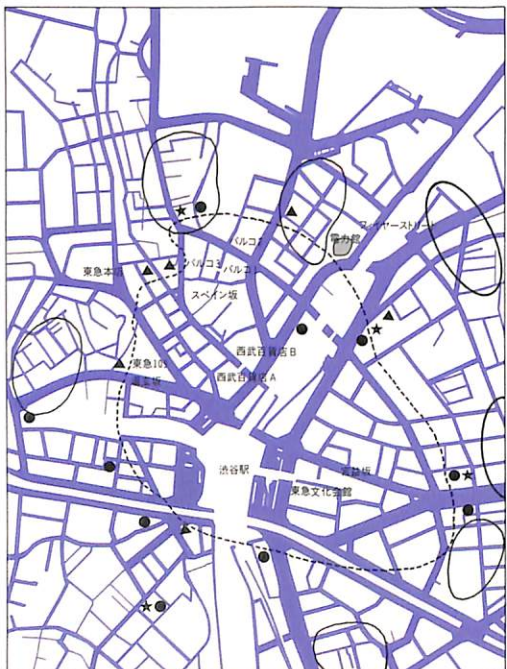
（おた・まさかず 博報堂生活総合研究所主任研究員）

●若者の動線グラフ



◎渋谷の人気ゾーンと600mショップ

- 床屋
- ▲クリーニング屋
- ★米屋



ロンドンと盛り場

山岸 健

LONDON



●マン・イン・ザ・ストリート

エドガー・アラン・ポーの小説に『群集の人』(一八四〇年)という小品があります。物語の初めの部分は、ロンドンのある喫茶店で私(語り手)がコーヒーを飲みながら窓の外を見ている。そこはかなり繁華な場所、通りを次から次へいろいろな人々が歩いてゆく。私はたまたまその人々のなかのある人物に興味を覚え、私はその人物に気づかれないようにあとを追ってゆく。その人はいったいどんな人か、どこに住んでいるのか、なぜぶらぶ

ら歩いているのか、それを知ろうとしてその人のあとを追いかけてゆくわけです。そうすると驚くべきことに、その男はいろいろなテンポでほとんど休むことなく町中を歩きまわる、結局、私はその人物を追いつながら一晩中ロンドンを歩きまわることになります。ポーは、ひとりであることに耐えがたく、常に群集のなかに身を沈めていないと安心できない、そういう気分の人間を文学に登場させたわけです。

当時(一九世紀)のイギリスでは、産業革命の成果が人々の生活のなかに花開き、また鉄道の開通もあいま

でロンドンや地方都市の発展が見られました。しかし、さまざまな都市問題が人々の関心の的となり、今世紀のはじめには田園都市運動が生まれ、やがてロンドンの郊外にそのモデル的な都市がつくられ始めました。とにかくポーのこの作品は、ひとつの時代の始まりを私たちに描いて見せたともいえる注目されるべきものです。

この『群集の人』という作品に、ロンドンの盛り場の一面を見ることができるとは思いません。ポー・ドレーンもほぼ同じ頃、パリの群集に注目していると、ドイツの思想家ベンヤミンが言っています。ベンヤミンの

言葉を借りれば、フラヌール（遊歩者）——街頭をぶらぶら歩く人々、シヨッピングを楽しむながら行き来を楽しむ人々——が、この一九世紀中頃から出てきている。ポーの群集の人にせよベンヤミンがボードレールの仕事を通して見たフラヌールにせよ、ドーバー海峡をはさんでほぼ同じ時代に出現したわけだ。

ところで、都市生活の舞台では、互いに誰だかほとんど分らなくなってしまう。いわば、顔をなくしてしまうわけです。この誰でもあり、誰でもない人間を非常にうまく言いあらわしているのが、ハイデッガーが用いたダス・マンという言葉です。誰でもあるとともに誰でもないという、そうした人間の状態をもっともはっきりと体験することができるのが盛り場です。

都市は、建物とかいようなものがある物理的な世界であるだけでなく、私たち人間が生きている日常的な社会的世界です。だから都市を見ると必要なのは、この日常的な人間の世界を見落とさないということです。普通の人間は「マン・イン・ザ・ストリート」と呼ばれますが、こうした普通の人間、つまり日常生活者に注目するのだったら、都市の姿を見ることはできないでしょう。ブルーストは「ジャン・サントウイユ」という作品で「土地のさまざまな場所はまだ人間である」と述べています。人間の場合と同じように、場所も個性的だということです。都市が単なるハードな世界であるばかりでなく、徹底してソフトな人間の世界でもあるとすると都市の都市性は盛り場に明瞭に見られるといえるでしょう。

●ロンドンの二種類の盛り場

さて、このようなことをふまえて現代のロンドンを見てみるとどうでしょう。都市ロンドンは二つの核から成り立っています。ひとつの核はウエストミンスターで

これは政治の中心。もうひとつは経済活動の中心であるシティと呼ばれる場所です。位置関係からいくとロンドンの中心部のチームズ川のやや上流にあたるところがウエストミンスターで、それより少し下流の方にシティがある。その境目あたりのところに、いわゆるロンドンの盛り場空間があるわけです。ロンドンのスクウェアで一番有名なトラファルガー・スクウェアからピカデリー・サーカスへかけて、またトラファルガー・スクウェアの背中部分にあたるソーホー地区、つまりトラファルガー・スクウェアからオックスフォード・ストリートあたりへかけての一带が、ロンドンの盛り場といえるところです。ロンドンの場合、東京のように銀座、新宿、渋谷、池袋……というように多くの人出が見られる盛り場を数多く指摘することはむづかしく、そういう繁華な場所はさきの地域一帯に限定されるといっていいでしょう。

ソーホーはイルミネーションも華やかで、ちよつと遊園地のような感じです。ピカデリーの方に近づくとも芝居小屋や映画館あるいは有名な劇場が集っていて、ミュージカルも上演されている。またオックスフォード・ストリート界わいは世界に幾つかあるファッションの一中心地で、六〇年代に二世を風靡したミニスカートはここから生まれたものです。

では、ロンドンで盛り場はそこだけなのかというところではない。ちよつとした盛り場は数多くあるのですが、いわゆる東京の中心的盛り場のような場所は今言ったトラファルガー・スクウェアからピカデリー・サーカス、ソーホー地区あたりにかけてということになります。トラファルガー・スクウェアを中心とした二地区は大変賑やかですが、そこにはロンドン市民のほかに世界中からの観光客が集まっています。ロンドン子の憩いの場とはいいがたい面があります。逆にロンドンの暮しを考えるうえで重要なのは、むしろもっと小さな街角の盛り

場ではないかと思えます。

あちこちの街角にパブがあります。パブというのは要するにパブリック・バーの略で、文字通り大衆酒場です。このパブがもしかするとロンドンの盛り場のもうひとつの典型的な姿かもしれないと見えるのです。

パブはそれぞれの地域にとけこんでいて、その地域に住んでいる人が日常そこにやってきておしゃべりしたり、夜の時間を楽しむ、一種のミニ社交場です。いずれにせよこのパブ・ライフがロンドン市民の日常生活の重要な一部分であることはまちがいないさうです。だからある意味では、ロンドン子にとっての盛り場はピカデリー・サーカスやソーホーにあるというよりは、じつはパブを中心とした街角にあるといったほうがいいようにも思えるのです。

もともと都市という場所はモンテスキューも言っているようにどんなストレンジヤー（異邦人）も受け入れてくれる故郷ですが、なかでも盛り場はストレンジヤーを容易に迎えてくれる空間ではないかと思えます。だから盛り場はまさに都市的空間たりうるわけです。

ピカデリー・サーカスやソーホー地区は一度足を運んだ日本人なら誰でも分るように歓楽的なムードの強いところで、その意味ではロンドンの中心的盛り場であることはまちがいないのですが、パブ・ライフや公園での生活に見られるように私たちの眼には盛り場とは到底いいがたいそうした場所が、ロンドン子の生活に意外なほど深く入り込んでいるのもまた事実です。

中心部の歓楽的な盛り場と、市民にとつての日常的な身近な盛り場、その両方を同時に見ていくことが、人間にとつての盛り場を考えるうえで大切なことではないかと思うのです。都市も盛り場も人々にとつては日常生活の舞台なのです。

（やまぎし・たけし 慶應義塾大学教授 談）

若者の盛り場イメージ

池田利道

昭和五十六年に、若者にとつての都市とは何かといったテーマで調査をしたことがあります。それは後で本にもしているのですが『若者と都市』総合研究開発機構編）そこでケーススタディ的に、若者の抱えている都市の魅力、というのを、渋谷・原宿、高円寺、江古田という三地区を例にとり調査・分析したわけです。これは非常に難しいテーマで簡単に答えが出る問題ではないのですが、まず、ここでいう「若者」についていうと、年齢は一五歳から二四歳としました。なかでも、盛り場と若者について考えていく際には、高校生、大学生が若者の中心というか、この層に両者の関係が凝縮されているとみていいのではないか、と思います。やはり就業者は時間的な面もあり、若者特有の行動パターンというよりも、就業者一般の行動パターンとして説明される部分が大きいようです。

そこで、その三地区をみてみますと、共通して言えるのは、若者が都市の魅力として感じるのは「裏通りの」なところに集中していることです。たとえば渋谷の公園通りや原宿の表参道よりは、スペイン通りや竹下通りにむしろ魅かれる。それは江古田のように、大学が核になっていて、汚い路地がいっぱいあるようなところでも同様で、そこでは、大学と飲み屋と喫茶店とが非常に密接な関係を持ちながらひとつの町を形成しているわけです。これは、どう見ても魅力ある都市空間づくりといった教科書的なものからは、ちよつとはずれてしまっている。あるいは、オーソドックスにいろいろな調査をやっても同じようなズレを感じる。調査にまちがいはないのですが

やはりズレる。原宿の魅力はどこにあるかという調査でも、表参道のけやきの並木道だということになってしまっています。ということは、こうした調査にひっかかってこない部分に、どうも若者と都市の関係、若者と盛り場の関係というのができているのでは、と思います。

では、どうしてこういうズレている所に若者は魅力を感じるのかと考えると、彼らは町全体とべつたり関わらず、ひとつひとつ気になった「たまり場的なスポット」をまず持っているということがいえるのではないか。そして、そのたまり場的なスポットを素材にして、ネットワークのようなものが作れる町に魅力を感じているからではないでしょうか。

たとえば二四時間営業のコンビニエンス・ストアみたいなものがありますが、そこは時間ごといろいろな人のたまり場になっている。夕方頃は高校生の、夜ちよつと過ぎると独身サラリーマンの、もう少し深夜になってくるとホステスさんがたまり場にして、もう一回飲みに行くこうかなんて話が出たりする。そのように、ひとつの施設とか場所でも、時間や人で、さまざまな使われ方をするし、そうした使われ方の可能性の多さが、また都市の魅力のひとつになっていると思えます。そして、そのように盛り場の定義も、かつてのような繁華街とかデパートがあつて、ターミナルがあつて……というものからズレてきているのではないのでしょうか。

若者の盛り場空間ということ考えた場合、「場」と呼べるのかどうか分らないけれど、彼らが大きな魅力を感じている、いわば「もうひとつの盛り場」というのがあ

るような気がします。都市が本来的に持っている「盛り機能」みたいなものとも言いましょうが。そこでは、空間とか施設とか装置とかいうものは、さほど重要な要因ではないという気がするのです。むしろ、個々人の生活領域の広がりとの関係が深く、その日の友人によって別々の酒場に出かけるというように、たまり場も盛り場も固定していないわけです。つまり、若者の生活行動というものがまずあつて、盛り場にしろ、個々の町にしろ、それとの関連で初めて意味を持ってくる。「初めに盛り場ありき」ではなくて、生活行動の展開に応じて「場」が使い分けられる。

前述の三地区の調査をみると、まず「高円寺」のようなタイプでは、若い人たちが非常に沢山住んでいる。つまり、バックグラウンドは多くの木造アパートで、それは大都市でなければ成立しないものだけれど、彼らの行動様式は、大都市型というよりは地方のスナックに集まっているのとなんにも変わらない。「江古田」はどうかというと、大学があつて町があるという簡単な構造になっていて、これは地方都市に多く見られるタイプです。そして、最後の「原宿・渋谷」ですが、これは立地とか場所性とはあまり強い結びつきはない。それが証拠に、原宿・渋谷に集ってくる若者の中に、原宿・渋谷出身者は少ない。ほとんどは、近郊を含めた広い地域に住む若者です。『原宿・渋谷』というのは、あえて言ってしまうと単なるイベント空間にすぎないわけです。

ということになると、三地区をそれぞれ切り離して個別に見ると、たいした特徴がないことがわかる。むしろ



この三地区に見られる要素が混在していることよって東京が成り立っていて、それが全体で盛り場空間を形成しているということだと思ふのです。

●盛り場をネットワークする

そこで、もう少したまり場のネットワーク化といったようなことを考えてみます。たとえば、新宿ゴールデン街というのがありますが、あれはあの狭い地区にあれだけの店が集まっている点にひとつの意味があるわけですが、今、あの若い人達にとってはそれはたまたま集まっているだけで、その中に何軒も知っている店があるなんていうのは格別かつこ良いことでもない。それよりひとつの店で、そこでならカウンターに入っても構わないとか、他の人からみたらとつきにくいような所で、親密な関係が出来ているというところが重要でかつこ良いわけです。町をよく知っているより店をよく知っている方が、むしろ面白いということになる。町は大きすぎるわけですから、よく知ってしまうとどうしようもない壁につきあたってしまう。店というポイントを作つてそれをつなげていくわけです。具体的には自分の好きな店を

つくり、店主や客との間にさらにネットワークみたいなものをつくっていくということではないのでしょうか。たとえば、野球チームをつくったり、会報みたいなものを出したりとか、そういうことを通じて行動と「場」との一体化が生まれる。そして、それがさらに外との交流に発展していつ、次第に町全体に広がっていく……というネットワークです。そうすると、ポイントをしっかりと把んでおくとかかなりの広がりが可能になってくるわけです。こういうことは、若い人達みんながやっているとはもちろん思えないけれど、少なくとも、今の若者の意識として、そういう関わり方がどうも面白そうだというのは出て来ているように思われます。

それはコミュニケーションと言ってもいいと思います。しかし、これも原宿の表参道と高円寺とはスタイルも質も違ってくる。高円寺などではそのコミュニケーションが生々しい。たとえば店主の具合が悪ければ、俺が代わつてあげようとなる。そうしたコミュニケーションが原宿にあるかといえば、そうでもない。けれど、ここでも店主が客に触発され、それによって客の方もまた触発されるという関係がある。そういう言葉ではないコミュニケーションみたいなものが、盛る「というか」はやる」といった状態を招いているといえます。つまり、店主の方ももうけようという意識があまりなくて、自分たちも商売で楽しもうという意識が強い、ということがあ

るのではないかと。そのへんは店の移り変わりのサイクルがすごく早いのが見てわかる。これは調査したわけではないのですが、商売というもののこのあたりがあまり無いという感じがします。ちよつとした店を持つて、収支決算はともかく非常に楽しかったから良かった、という感じです。そう考えないとああいうサイクルの早さは理解できない。資本主義の原理からいえば、サイクルの激しい所では商売が成

も上で、しかもお金を持っていないと遊べなかった。原宿族」というのは、経済的に恵まれたほんの一握りの若者達だった。それが、今は誰でもそれぞれの町と関係を持てるようになった。

そういう意味では、お金を持てるようになったというのは大きいのですが、ただし、言われているほどにお金があるわけではない。お金が無いからこそ、その少ないお金をうまく利用するために貸しレコード屋なんかを作つてきたわけです。だから、買い物なんかも、せいぜい一五〇〇円でいどのTシャツを買うぐらいでしかない。にもかかわらず、若者が目立つ。それは、やはり、お金の使い方がうまくなったということ、そして、町とつきあひ方がうまくなった、行動半径も広がった、経済的にも少しはゆとりが出てきた……といった要素の合体だと思ひます。豊かになったからだの一言で片づけるのでは一番肝心な部分を見落してしまふと思ひます。

●イメージが都市と生活を動かしている

盛り場によって集まる人の年齢層が違う、ということはある。街の個性というが、街の成り立ち、盛り場の態様、経過みたいなものがあって、それによって階層が変化してくるというのが当然あると思ひます。たとえば、原宿でも竹下通り側と表参道側では個性の差がある。ところが、実際に歩いてみると歩いてる人はそんなに変わらないのです。竹下通りは高校生だけで、表参道はOLだけかという決してそうではなくて、みんなグルグル回っているわけです。ただし、高校生は竹下通りを歩いている時には生き生きしているし、一五歳ぐらいのOLは、そこを足早に歩き去ってしまう。集まっている人たちにそれほど年齢差はないのだけれど、町の個性みたいなものがある特定の年齢層がびつたりくるから目立つのでしよう。



上、竹下通り
下、スペイン坂
Photo:伊那英次

り立たず、結局、大きな資本が、中小を吸収していくしかないはずですが、にもかかわらず、そうした原理を超えて店が成り立っているわけです。町のスナックにしても非常に回転が早い。前の人が失敗したのどうしてまた新しい店が出現してくるのか。たとえつづけても二、三年面白いことができればいいやというような気分があるのではないかと。

それは「遊び心」といってもいいのかもしれない。同世代意識のようなものがあって、売り手である団塊の世代ぐらゐの人たちと、買い手である一〇歳年下ぐらゐの人たちとが、つながっているようなところもあります。つまり、団塊の世代が仕掛けたものを、若者たちが、豊富な感性でもって増幅している。こういう関係のなかで、売り手と買い手の意識が共有され、利害が一致し、そこに商売が成り立つというが、そういう関係そのものが商売になるというわけです。

●町とのつきあひ方がうまくなった

盛り場の魅力の大きな要素としてはもちろん「メイン」というものがあって、それは渋谷・原宿というなら、パ

原宿という町はもとよりファッションの伝統があります。その伝統の上で、アパレル的なものに非常に特化していったところが若者にフィットした原因だと思ひます。その点では、さきほどのたまり場のネットワーク化とやや似たところがあります。彼らにしてみれば、そういう特化したポイントを幾つか持つていて、そこをうまく使い分けるところに楽しみがあるわけです。その点では池袋のように駅から外へ出ない建物の中ですべて間に合つてしまふようなところは魅力がない。なんでもかでもございませうというのはあまり面白くない。便利かも知れないけれど面白くない。

もう一つ、ファッションと並ぶ要素としてカルチャーという点についてみますと、例えば渋谷のような町を見ても、あまり成功しているような気がしない、あれで限界のような気がします。都市に「劇場」という要素をつ

て加えてみても、どうもそれがプラス・アルファになっていない。そこを考えてみますと、これは誤解されやすいのですが、都市のイメージがキーポイントになっていると思ひます。さきほどから言つてきた都市の個性とかいうものも、すべてイメージに集約される。プラス・アルファとか呼んできたものもまた然りです。渋谷にしても、「劇場」という要素が都市のイメージというレベルにゆきついていないところに限界があるのではないのでしょうか。つまり場のネットワークにしても、それは物理的でも、個として決まったものがあるわけでもない。何か目に見えないネットワークのようなものがあり、個人の行動もそうしたものに沿つて動いている。それを動かしているのは何か。それはやはり自分の生活イメージであつて、それが町のイメージとびつたりと合つて、増幅しあつて動いているのかな、という気がしますね。(談)

(いけだ・としみち 勸東京都市科学振興会主任研究員)

都市計画手法でつくられた 東京の副々都心吉祥寺の盛り場

保存された開市

「今、中央線で開市が残っているのは、うちだけです。よ、もつとも地元ではファミリ横町と呼んでますがね」と誇らしげに語ってくれたのは地元吉祥寺の大手スーパー三浦屋の会長であり武蔵野市商店会連合会々長として、戦後の吉祥寺の変遷をつぶさに見とどけてきた山崎喜七氏である。

確かに山崎氏が言うように、戦後の焼跡に軒を並べるようにして建てられた開市がそのままマーケットとなつて今でも賑わっている所となると数えるほどしかない。かううじて上野のアメ横のように、マーケットの一部を集合ビルの中に押し込んで新しい形で生き伸びている例はあるが、たいがいは都市再開発にあわせて取り壊されてしまった。

開市。ある世代にとっては郷愁にも聞こえる雑居型の商店群は、まさに戦後の焼跡の風景をそのまま映し出す盛り場の原形のような場所だ。その開市が外見こそきれいになったものの、あの頃の活気のままに生き続けている場所こそ、吉祥寺の北口なのである。

戦後の吉祥寺の発展は、目を見張るばかりだ。駅前周囲に有名百貨店をいくつも擁し、地元武蔵野市ばかりでなく隣接する三鷹市、清瀬市、保谷市、田無市だけでなく杉並区、練馬区、世田谷区からも人が集る中央線最大の副々都心に成長した吉祥寺。その吉祥寺に一見似合い

そうもない趣きで、北口駅前の一等地を占有するのが通称ファミリ横町というマーケットである。

このマーケットがなぜ戦後四〇年間取り壊されることなく、しかも吉祥寺のひとつの顔として栄えてきたのか、そのことに触れる前にまず吉祥寺の歴史をざっとふり返ってみよう。

幻に終わった井ノ頭線延長計画

戦前から戦後にかけて、吉祥寺は中央線の電車の終点であった。といっても新宿との間には、大久保、中野、荻窪と三つの駅しかなく、中央線沿線は、ようやく住宅地として宅地造成が始まったばかりであった。その吉祥寺に渋谷とを結ぶ井ノ頭線が開通したのは昭和八年であった。

終戦後まもなく、吉祥寺の駅前に、どこの都心にも見られるような大きな開市ができた。マーケットと呼ばれるような大きな商店街に発展するのこそ長い時間はかからなかった。二坪から三坪ぐらいの小さな店も含めて、現在のサンロードをはさんだ両側に駅前最盛期には二〇〇軒あまりがひしめきあっていたという。現在のようなスーパーマーケットができるずっと以前に、そこは安くて何んでもモノがそろった立派なマーケットだったと、前述の山崎氏は懐古する。

当時の吉祥寺の中心というと、現在のサンロードのあ

たりになるが、今と大きく違うところは、モールのようなものではなく、バスが通る一般道路だったことだ。バスは当時から既にかなり広域から集ってきっていたが、やっとな通れるようなその道を通って駅前に停車していたわけだ。

昭和二七年頃、井ノ頭線を秩父まで延長させようという話があった。その計画によれば、ちょうどマーケット街を貫通するように路線が引かれることになる。当然マーケット街からは反対運動が起った。結局東急は秩父に乗り入れを予定していた西武の反対を受けて、この計画は打ち消えになった。しかし、この話を皮切りに北口マーケットの整理を含めた駅前再開発の意見が地元商店街からも出るようになった。実際には店舗数が多いにも多く権利調整がむづかしく、意見の一本化などといういてきそうもない状態だった。

ユニークな駅前再開発プラン

商店街が駅前再開発に意欲を表わすようになったのは昭和三〇年代に入ってからである。となりの三鷹駅前に公園のゲタバキ型住宅（二階部分に商業施設の入った集合住宅）ができて、商業環境を整えようという動きが出てきたことに対する危機感のひとつのあらわれだった。

武蔵野市が正式に駅前再開発を目的とする調査・プランづくりを始めたのは、昭和三五年であった。調査・研

吉祥寺駅前再開発の変遷

昭和42年

・平和通りの一部整備



昭和57年

・公園通り一六mへ拡幅



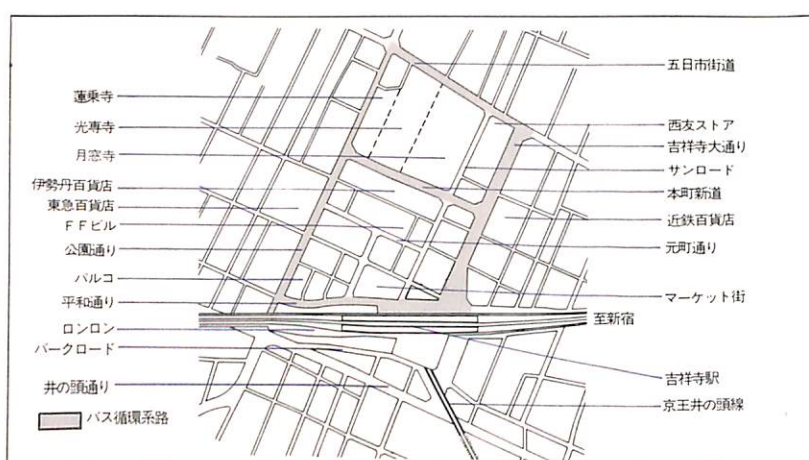
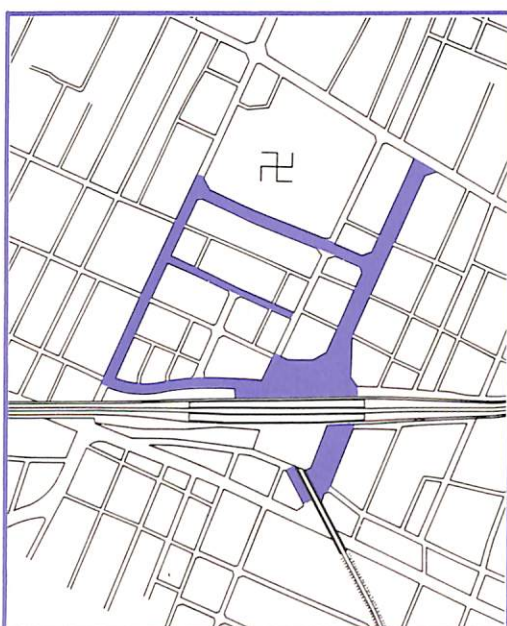
昭和49年

・吉祥寺大通り二二mへ拡幅
・本町新道一六mが開通



昭和62年予定

・駅前広場完成





◎年表・吉祥寺の変遷

明治	22年(1889)	吉祥寺、境、関前、西久保の4村が合併して武蔵野村になる。甲武鉄道開通。
	32年(1899)	吉祥寺駅開設。
大正	2年(1913)	井ノ頭恩賜公園開園。
	8年(1919)	中野-吉祥寺間電化される。
	11年(1922)	中野-国分寺間複線化される。
昭和	3年(1928)	町制実施(武蔵野町になる)。
	8年(1933)	井ノ頭線渋谷-井ノ頭間開通。
	9年(1934)	井ノ頭線吉祥寺まで延長。
昭和	30年頃	駅周辺の交通環境の改善が取りざたされるようになる。
	37年(1962)	高山英華研究室による駅前再開発プラン提案される。
	39年(1964)	市、市議会、商工会議所、地元商店会による都市計画協議会により計画案の検討行方。10月都市計画道路及び駅前広場計画が決定される。
	41年(1966)	市議会、地元との協議を経て、事業計画を決定。
	42年(1967)	事業に着手。
	43年(1968)	再開発計画の商業核を形成するため(財)武蔵野市開発公社設立。西友ストアー開業。
	44年(1969)	荻窪-三鷹間複々線化にともなう吉祥寺駅の高架化。「ロンロン」(吉祥寺ステーション・センター)開業。
	46年(1971)	伊勢丹(開発公社管理B棟)開業。
	47年(1972)	サンロードのモール化完成。
	49年(1974)	F&F(開発公社管理A棟)開業。
	50年(1975)	近鉄百貨店開業。
		東急百貨店開業。
	50年(1975)	都市計画道路「吉祥寺大通り」と本町新道が全面完成。
		元町通りのモール化完成。
	55年(1980)	パルコ開業。
		パーキング・プラザ完成。
	60年(1985)	公園通りの拡幅ほぼ完了。
	↓	
	62年(1987)	道路及び駅前広場計画完了予定。



●1、サンロード●2、バス広場●3、近鉄百貨店前●4、ファミリー横町 (Photo: 神山貞次郎)

究にあたつたのは、現東京大学名誉教授・高山英華氏の研究室で、同氏の提案により直接は当時大学院生であつた伊藤滋氏(現東京大学教授)と石田頼房氏(現都立大学教授)が報告をまとめることになった。約二年間かけて行なわれた研究から引き出された最終プランは既成の概念にとられないものであつた。そのなかからユニークな三点をあげれば、ひとつは、当時のメインストリート(現サンロード)の東側に一本幅員の広い南北に貫通する都市計画道路をつくらうというもの。当時そこは日通や民間の倉庫や大きな公共用地があつて家がほとんどなかった。道路建設の了解が取りやすくだらうということだつた。五日市街道を通つて周辺から入ってくるバスを都市計画道路を通して駅前へ集め循環させる。二つ目は、駅前のバスターミナル・プランで、それまでのように広い四角な広場にバスを並べるといふやり方を取らずに、駅前の道路の幅員をふくらませて、バスの停車する部分と通過してゆく部分を分けるだけにする。伊藤氏によれば、通勤用の駅前広場はバスがどんどん流れていけばいいわけ、そのためにはあえて広い空間をとらなくても駅前広場を長くすれば、充分機能するという斬新な提案だつた。さらにきつた特徴が三つ目の駅前マーケットについて。のプランである。サンロード、ダイヤ街と組み合わせる非常に賑わつておりこれをとり壊さなくても、バスターミナルは前述のプランで機能する。また既成商店街の活性化をはかるうえでも、吉祥寺の特質として当面このまま残しておいたほうがよいというものだつた。

この報告書の基本は、既成の計画思想にとられず、むしろ吉祥寺の現状を見ええうえて練られたもので、結果的にその後都と武蔵野市の調整によって一部修正されたものの、二〇年間にわたつて実施された吉祥寺駅前再開発プランの基礎になつた。

一方、商店街側でも駅前再開発についてのプランは考

成功した大型店の誘致

えられていた。とくに商店街側が警戒していたのは、駅前に大型店を建てることであつた。駅前に大型店を誘致したばかりに近隣にあつた既存商店街が衰退した例は、その後柏市をはじめいくつもある。商店街側ではそうしたデメリットになることだけは避ける方向で、駅前再開発を行うというプランを打ち出していた。武蔵野市の実施した駅前再開発のプランは、期せずして商店街のこうした要望を充分満たすものとなつた。

さて、駅前再開発は結果として、それまでのバス通りであつたメインストリートをサンロードとして歩行者専用のモールに変え、またマーケット街周辺を活性化させた。しかしそれだけではない。今日の吉祥寺の発展の大きな原動力になつたのは大型店の積極的な誘致にある。市の開発公社が元の学校跡地に建てたA・B二棟のビルの片方に地元商店のF&Fを、一方に伊勢丹を誘致したのを手始めに、駅前から二〇〇―二五〇mの周辺に、つまりバスの循環道路にそつて、西友、近鉄、東急、パルコという五つの大型店を誘致した。これが後に吉祥寺方式と呼ばれるようになる。大型店と地元商店街の共存共栄をめざした独特な商業空間づくりである。

筑波大学助教授で吉祥寺の現状を調査した日端康雄氏によれば、都心部にしかなかった大型店を、副々都心に引っぱり込んだことにより、吉祥寺は想像できないほど大きく発展したという。とくに、大型店を駅の近くではなく、いくらか距離を置いて建てたことにより大型店と商店街を回遊する動線を生じさせ、結果的に吉祥寺駅前全体を活性化させることになつたと分析している。

これはズバリ地元商店街の思惑通りであつた。吉祥寺に魅力ある大型店を誘致することで集客率を高め、地域

間競争に先手必勝しようという考えが商店街側にあつたわけだ。そして誘致するにあつたのは、柏方式のように商店街を外へ押し出すのではなく、むしろ地元の商店街を抱きかかえるような形にすれば、地元商店街にもメリットは生まれると判断したのである。そしてこれがみごとにあつた。

大型店と戦後のなごりを残すマーケットがおりなすコントラストは、吉祥寺に不思議な魅力を与えている。清潔で近代的なビルが立ち並ぶ街は、それなりにいいものであつても、人情や機微を感じさせる空間には出会

にくい。そうした均質的な街が多くなつてきた中で、微妙な味わいを残しながらも近代化しつつある吉祥寺は現代ではまれな魅力ある都市空間だといえる。

二〇年の歳月を経て六二年三月吉祥寺の再開発は完成する。当初一〇年のオーダーを目標にして考えられたプランは結果的にその二倍の二〇年間機能してしまつたことになる。地元商店街からは、そろそろ本格的な再・再開発を望む声が始まっている。その時にはかならずマーケットの存続が問われるだらう。たとえばどうあれ、マーケットが持ち続けてきたバイタリティーとヒューマニズムは失われないほしい。それが絶えてしまうと、東京からほんとうの意味での盛り場がまたひとつ消えることになる。

※今回のリポート作成にあつては、以下の方々に御協力を得ました。高山英華・東京大学名誉教授、石田頼房・東京都立大学教授、日端康雄・筑波大学助教授、山崎喜七・武蔵野市商店会連合会々長、押田健雄・(株)TAKKE 9 計画設計研究所長、武蔵野市都市再開発指導課

道路側か、庭側か？ 塀の「表」はどちら

- 住まいの塀の表側は街路に面した方が、それとも庭の方か——。改めて聞かれると戸惑ってしまうが、財団法人・第一住宅建設協会がこのほどまとめた首都圏2カ所の一戸建て住宅団地の調査結果から、敷地の規模や居住者の年齢層によって見方が変わってくることが明らかになった。
 - この調査は千葉県流山市の南柏団地（505戸）のうち53戸と、埼玉県坂戸市の坂戸団地（931戸）のうち56戸を対象に庭の機能などを調べたもので両団地とも36戸が回答した。塀の表と裏の区別については、南柏団地では24戸（66.7%）が街路側を表とし、9戸（25%）が庭側を表とみていた。一方、坂戸団地では街路側を表とみるのが33戸（91.7%）と圧倒的に多く、庭側を表とみるのは2戸（5.5%）に過ぎなかった。
 - 表は道路側という見方が“主流”だったものの、興味深いのは庭側とみる回答が南柏団地で4分の1あるのに、坂戸団地では1割にも満たなかったこと。南柏団地の平均敷地面積が261平方メートルと、坂戸団地より3割ほど広いうえ居住者も高齢層が多い。「観賞用に庭の手入れを十分行っている人ほど庭側を表と意識するのでは」とは同協会の分析だ。それにしても庭つき一戸建てに住んで「表裏論争」に加わりたもの。
- （日本経済新聞昭和60年7月16日夕刊「女性かわらばん」掲載記事）

資料

	南 柏 団 地	坂 戸 団 地
塀の表を 街路側と考える人	66.7%	91.7%
庭 側と考える人	25.0%	5.5%
分譲後の年数	24年	8年
平均敷地面積	261.1㎡	200.3㎡
庭の手入れを おこなう人		
夫	61.1%	30.6%
妻	16.7%	41.7%
夫+妻	19.4%	13.9%

当協会昭和60年12月刊
「戸建住宅団地における外部空間の変化に関する研究」より

▲第一住宅建設協会の経歴▼
昭和30年、第一生命保険相互会社の基金をもとに設立された財団法人であります。設立以来公益法人の理念にもとづき低廉な住宅の供給と、住宅にかかわる土地利用計画・居住環境計画・住生活改善に関する調査研究をつづけ、民間として稀有の建設大臣表彰と建設大臣感謝状をうけました。

▲本誌発行の趣旨▼
住宅戸数はすでに全世帯数を上まわり、しかも都市化がすすむなかで、私たちはより快適で充実した生活を求めております。塀で囲まれた屋敷の中に豊かさを求めるだけでなく、膨大な資本の投下された市民のためのいろいろな都市の施設を、自分の生活の中に位置づけ上手に利用する方法を知ってほしいと思います。そのために、都市のいろいろな「しくみ」と使い方を西洋・日本の都市を事例にとりあげ、どなたにもあきることなくご理解いただけるよう、年二・三回の予定で編集発行していきたいと思っています。

■編集・発行・財団法人第一住宅建設協会
東京都中央区京橋2丁目4番12号
03-281-5773

編集・デザイン協力
株式会社アルシーヴ社・ライススタジオ
印刷・相互印刷工業株式会社
頒価・300円＋送料200円

City&Life NO.5

●企画委員
日笠端（東京大学名誉教授）＋日端康雄（筑波大学社会工学系助教授）＋高橋公子（日本女子大学住居学科助教授）＋徳田敦司（当協会常務理事）＋三輪恒（当協会理事）
●1985年12月発行

第2回目で石川栄耀さんのことに触れましたが、石川さんは、戦後新宿の都市再開発についても懸賞募集をしました。その時に一等になったのが内田祥三さんの息子の内田祥文君の計画だった。彼はなかなかいい設計をやっていて、深川の懸賞募集も一等だった。石川さんは東口と西口両方合わせたかなり広範囲のものを考えていた。内田君のプランは、既成市街地だった東口についてはあまり大きなことをせず、むしろ西口についてのものでしたが、浄水場のあたりに都庁を持つてくるという当時としては大変大胆な発想でした。40年も前に、都庁の新宿への移転を提案したわけですから、先見の明があったんですね。それでこれが一等になった。

ただ石川さんは、東口の方ももっと面白くしようという考えをもっていた。それで、出てきたのが歌舞伎町のプランなのです。

新宿という街は、今でこそたいへんにぎわっていますが、戦前はまた武蔵野の面影が残っているような所でした。僕は子供の頃から、新宿の周辺に住んでいましたから、割と新宿についてはよく知っています。関東大震災の前の新宿は、まだ道路はみんな泥道で、青梅の方のお百姓さんが馬力（荷馬車）に野菜を乗せて東京に運んでくる。その帰りに新宿で一膳飯を食ってゆくというような所だった。大正7、8年の頃というのは、副都心という本郷三丁目や四谷見附、赤坂見附といったあたりをさしたと思う。そのもうひとつ外側に新宿はあったわけですから、東京の入口みたいな所だったんです。

それが伊勢丹の前身であるほてい屋や名画を上映する武蔵野館などができて、少しずつ人が集まるようになる。本郷にあった中村屋もきた。中村屋の黒光女史という奥さんは、インド人をかくまったりして当時有名でしたが、それが今の場所へ来て、カレーライスを食べさせるようになった。武蔵野館はまだ今の三越のある場所にあつて、トーキーじゃなくて、無声映画だから、徳川夢声なんかが弁士で来ていたのを覚えている。山の手では一番いい映画館だった。新宿三丁目のあたりには、確か歌舞伎の劇場なんかもあったんじゃないかな。

まちづくり 思い出 ばなし ④

新宿・歌舞伎町——初めての 都市計画による盛り場 高山英華

そうやって少しずつ発展していくわけですが、やはり中央線や、西武線、京王線などが入ってきたことが大きかった。とくに中央線は、中野、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、吉祥寺という駅をつくって、戦後は通勤電車を走らせた。それで新宿がまた発達したわけです。

戦後の新宿の中心は、今歩行者天国になっているタカノから伊勢丹のあたり。市電が通っていましたが、まだ舗装はされていなかったように思います。石川さんは、この新宿道から少し離れた奥に、広場をつくった。それを囲むような形で大きな建物を建ててアミューズメント・センターにしようとしたわけです。石川さんは盛り場の研究家でもありましたから、盛り場的な人がたくさん集まる場所にするために、まず広場を計画した。第5高等女学校などの跡地に広場をつくり、地主を説得して靖国通りをはさんで新宿通りまで、数本の道路をつくった。歌舞伎町という名がついたのもその頃だったと思います。

しかし、はじめはなかなか発展しなかった。それで広場にサーカスをよんだりして盛りあげたがやはり思うようにはいかなかった。ようやくコマ劇場とかミラノ座とかがぼちぼちできてきて、今のうちに繁栄するようになったのは、昭和30年代も後半になってからじゃないかな。

とにかく、そうやって日本で初めての本格的なアミューズメント・センターは誕生したわけです（談）。

〔たかやま・えいか／東京大学名誉教授〕



道路側か、庭側か？ 塀の「表」はどちら

- 住まいの塀の表側は街路に面した方が、それとも庭の方か——。改めて聞かれると戸惑ってしまうが、財団法人・第一住宅建設協会がこのほどまとめた首都圏2カ所の一戸建て住宅団地の調査結果から、敷地の規模や居住者の年齢層によって見方が変わってくる事が明らかになった。
- この調査は千葉県流山市の南柏団地（505戸）のうち53戸と、埼玉県坂戸市の坂戸団地（931戸）のうち56戸を対象に庭の機能などを調べたもので両団地とも36戸が回答した。塀の表と裏の区別については、南柏団地では24戸（66.7%）が街路側を表とし、9戸（25%）が庭側を表とみていた。一方、坂戸団地では街路側を表とみるのが33戸（91.7%）と圧倒的に多く、庭側を表とみるのは2戸（5.5%）に過ぎなかった。
- 表は道路側という見方が“主流”だったものの、興味深いのは庭側とみる回答が南柏団地で4分の1あるのに、坂戸団地では1割にも満たなかったこと。南柏団地の平均敷地面積が261平方メートルと、坂戸団地より3割ほど広いうえ居住者も高齢層が多い。「観賞用に庭の手入れを十分行っている人ほど庭側を表と意識するのでは」とは同協会の分析だ。それにしても庭つき一戸建てに住んで「表裏論争」に加わりたもの。

（日本経済新聞昭和60年7月16日夕刊「女性かわらばん」掲載記事）

資料

	南柏団地	坂戸団地
塀の表を 街路側と考える人 庭側と考える人	66.7% 25.0%	91.7% 5.5%
分譲後の年数	24年	8年
平均敷地面積	261.1㎡	200.3㎡
庭の手入れを おこなう人		
夫	61.1%	30.6%
妻	16.7%	41.7%
夫+妻	19.4%	13.9%

当協会昭和60年12月刊

「戸建住宅団地における外部空間の変化に関する研究」より

▲編集後記▼

○大都会の盛り場は、昼の顔・夜の顔・めまぐるしい色彩・忙しくすれちがう光・雑踏のリズムなど、なんとも複雑な空間だ。しかし、そこには自己忘却、やすらぎ、利便、流行を確認し演ずる不思議な舞台があるのだ。大都会の魅力の一つは、やはり盛り場だろう。

○盛り場というと、悪場所を想像する人がいるかもしれないが、最近では男女連れだつての行動が多くなってきたためか、明るいイメージの善場所が増えてきているようだ。

○盛り場の街区要件として、大型店が出店できるような整然とした区割地区と、迷路のような路地地区が、微妙にバランスよく配置されていることが必要だろう。吉祥寺なども駅前迷路街区を残したことが駅と大型店街区の間の毛細多岐ルートとなり、今日の変化にとんだ賑わいを呈しているだろう。

（常務理事・徳田敦司）

City&Life NO.5

●企画委員

日笠端（東京大学名誉教授）＋日端康雄（筑波大学社会学系助教授）＋高橋公子（日本女子大学住居学科助教授）＋徳田敦司（当協会常務理事）＋三輪恒（当協会理事）

●1985年12月発行

■編集・発行・財団法人第一住宅建設協会

東京都中央区京橋 2丁目4番12号

03-281-5773

編集・デザイン協力

株式会社アルシーヴ社・ライス・スタジオ

印刷・相互印刷工芸株式会社

頒価・300円＋送料200円

第2回目で石川栄耀さんのことに触れましたが、石川さんは、戦後新宿の都市再開発についても懸賞募集をしました。その時に一等になったのが内田祥三さんの息子の内田祥文君の計画だった。彼はなかなかいい設計をやっていて、深川の懸賞募集も一等だった。石川さんは東口と西口両方合わせたかなり広範囲のものを考えていた。内田君のプランは、既成市街地だった東口についてはあまり大きなことをせず、むしろ西口についてのものでしたが、浄水場のあたりに都庁を持ってくるという当時としては大変大胆な発想でした。40年も前に、都庁の新宿への移転を提案したわけですから、先見の明があったんですね。それでこれが一等になった。

ただ石川さんは、東口の方ももっと面白くしようという考えをもっていた。それで、出てきたのが歌舞伎町のプランなのです。

新宿という街は、今でこそたいへんにぎわっていますが、戦前はまた武蔵野の面影が残っているような所でした。僕は子供の頃から、新宿の周辺に住んでいましたから、割と新宿についてはよく知っています。関東大震災の前の新宿は、まだ道路はみんな泥道で、青梅の方のお百姓さんが馬力（荷馬車）に野菜を乗せて東京に運んでくる。その帰りに新宿で一膳飯を食ってゆくというような所だった。大正7、8年の頃というのは、副都心という本郷三丁目や四谷見附、赤坂見附といったあたりをさしたと思う。そのもうひとつ外側に新宿はあったわけですから、東京の入口みたいな所だったんです。

それが伊勢丹の前身であるほてい屋や名画を上映する武蔵野館などができて、少しずつ人が集まるようになる。本郷にあった中村屋もきた。中村屋の黒光女史という奥さんは、インド人をかくまったりして当時有名でしたが、それが今の場所へ来て、カレーライスを食べさせるようになった。武蔵野館はまだ今の三越のある場所にあつて、トーキーじゃなくて、無声映画だから、徳川夢声なんかが弁士で来ていたのを覚えている。山の手では一番いい映画館だった。新宿三丁目のあたりには、確か歌舞伎の劇場なんかもあったんじゃないかな。

まちづくり 思い出 ばなし ④

新宿・歌舞伎町——初めての 都市計画による盛り場 高山英華

そうやって少しずつ発展していくわけですが、やはり中央線や、西武線、京王線などが入ってきたことが大きかった。とくに中央線は、中野、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、吉祥寺という駅をつくって、戦後は通勤電車を走らせた。それで新宿がまた発達したわけです。

戦後の新宿の中心は、今歩行者天国になっているタカノから伊勢丹のあたり。市電が通っていましたが、まだ舗装はされていなかったように思います。石川さんは、この新宿道りから少し離れた奥に、広場をつくった。それを囲むような形で大きな建物を建ててアミューズメント・センターにしようとしたわけです。石川さんは盛り場の研究家でもありましたから、盛り場的な人がたくさん集まる場所にするために、まず広場を計画した。第5高等女学校などの跡地に広場をつくり、地主を説得して靖国通りをはさんで新宿通りまで、数本の道路をつくった。歌舞伎町という名がついたのもその頃だったと思います。

しかし、はじめはなかなか発展しなかった。それで広場にサーカスをよんだりして盛りあげたがやはり思うようにはいかなかった。ようやくコマ劇場とかミラノ座とかがぼちぼちできてきて、今のうちに繁栄するようになったのは、昭和30年代も後半になってからじゃないかな。

とにかく、そうやって日本で初めての本格的なアミューズメント・センターは誕生したわけです（談）。

〔たかやま・えいか／東京大学名誉教授〕



